

啄木・賢治と岩手公園

黒澤 勉

本稿は岩手の生んだ二人の偉大な文学者、石川啄木（一八八六・明治一九年～一九一二・明治四五年）と宮澤賢治（一八九六・明治二九年～一九三三・昭和八年）が、岩手公園をどのように描いているかを考察したものである。当然のことながら、それは同時に、岩手公園という素材を通して二人の生活や心情に迫ろうとすることでもある。

一 啄木短歌における岩手公園

岩手公園の前身は、南部藩主の居城、盛岡城である。南部氏が、かつて「不来方」^(注一)と呼ばれていたこの地に豊臣秀吉から盛岡城築城の許可を得た^(注二)のは、二十六代の信直（盛岡初代藩主）の時、一五九二（文禄元）年である。それを受け継いで盛岡藩二代藩主利直が築営、三代重直の時、一六三三（寛永十）年に完成した。城は西側を北上川が南流し、西に流れる中津川と、東に流れる雫石川の三つの川が合流する花崗岩の台地を埋め立てて建設され、以後二百年余りの長きにわたって君臨した。

明治維新（一八六八年）により、盛岡城は新政府軍に明け渡しとなり、一八七四（明治七）年、建物はすべて払下げられたり、取り壊しになったりして、以後管理する人もない草茫茫とおいしげる廃墟となっていた。それは戊辰戦争の際、奥羽越列藩同盟^(注三)に荷担し、朝敵の汚名を着せられた南部藩の運命を象徴するものでもあった。

この廃墟を訪れて一人、夢にふけたのが石川啄木である。それは現在の、公園として整備された岩手公園の雰囲気とはずいぶん違ったものであつたらしい。

教室の窓より遁げて／ただ一人／かの城址に寝に行きしかな

不来方のお城の草に寝ころびて／空に吸はれし／十五の心

城址の／石に腰掛け／禁制の木の実をひとり／味ひしこと（斜線は改行マーク）

これらの短歌を収めた歌集『一握の砂』が刊行されたのは一九一〇（明治四十三）年、啄木満二十四歳の時である。歌はいずれも盛岡中学時代の自分を懐かしんで作った回想歌である。以下、この三首について解説してみよう。

第一首、啄木の学んだ盛岡中学は現在、岩手医科大学循環器センターの立つ場所にあり、「城址」―現在の岩手公園までは三百メートルほどの近距離であった。島崎藤村や土井晩翠の詩集を読み耽り、鉄幹・晶子の刊行する歌誌『明星』に熱中していた啄木は、学校の勉強を怠り、先生が黒板を向いて板書し始めるやこっそりと教室を脱け出すこともしばしばで、担任の富田先生に幾度も呼び出され叱責を受けた「無類の欠席者、濟度し難き頑迷児」（『林中書』と題する自らの文章）だった。

第二首、「空に吸はれし十五の心」とは、窮屈な学校・社会から解放されて、ほしのままなる空想にふけた己が心、という意味であろう。詩人に憧れ、詩人こそこの世で最も尊い存在だと信じ、まっしぐらに文学の道に進みたいという夢想は、誰一人訪れることのない「城址」の「草」に「寝転び」ながら、つむぎだされ膨らんでいったものかもしれない。その夢想はやがて実行に移され、盛岡中学中退、そして最初の上京へとつながっていく。

第三首、「禁制の木の実」という言葉は旧約聖書『創世記』にある。それによると、エデンの園で神は男（アダム）と女（エヴァ）にそれだけは食べないようにと禁じた木の実があった。ところが二人は蛇に誘惑されてそれを食べてしまった。すると二人は自分達が裸であることに気づいて、いちじくの葉をぬい合わせて腰帯にした。それは善悪を知る知恵の木の実であった。神は自分の命令に背いた二人を楽園から追放した。この聖書中の逸話から「禁断の実」「禁制の木の実」などといった表現が一般によく使われるようになった。

啄木にとって「禁制の実」とは何であったか。文学である。節子との初恋も、その文学の上に花咲いたものだった。人の心をとりこにして離さない文学、人の心を酔わせ、涙させ、生の喜びや悲しみを綴る文学の魅力、これこそ啄木にとっての「禁制の木の実」であった。啄木がもし人生で最も多感な十代の少年時代に藤村や晚翠の詩、『明星』の短歌に出会うことがなかったら、おそらく「啄木」という文学者は誕生しなかつただろう。思春期という人生の嵐をこれらの情熱的なロマン主義文学の圧倒的な感化のもとに過ぎ、実人生、実社会の現実を軽んじたというところに啄木という文学者誕生の奇跡があった。

啄木のこれらの回想歌は、盛岡中学中退以後、筆舌に尽くしがたい実人生の辛酸をなめている中で、奔流のようにおのづと湧き出たものだった。未来への甘美な空想が現実の苦しみを忘れさせるように、懐かしい幸福な時代を思い起こすことによつて現在の苦しみが癒されることがある。空想とか、回想と呼ばれるものも、単に現実逃避の消極的な妄想にすぎない、などと笑うことはできない。「歌は悲しい玩具」であるといった啄木はそのことを身をもって証している。そして啄木の短歌を読む者もまた、己れの青春を懐かしみ、学校時代の幸福を思うのである。

(注一) 盛岡の旧名。藩主、南部利直が不来方の用字を嫌つて「森ヶ岡」と改称。それが「森岡」となり、四代藩主重信の時に「盛岡」と改められたという。「森ヶ岡」は森、山々に囲まれた岡という意味であろうが、そこに「さかる(盛)」という漢字を当ててこの地の繁栄を願つたものであろう。

(注二) 南部信直は、三戸南部を継ぎ、九戸政実と争つて勝利を収め九戸城(福岡城)に移つたが、北上川の水運を利用できる交通の要衝にあたり、しかもその流域が穀倉地帯である岩手郡仁王郷不来方へと南進をはかった。

(注三) 新政府軍の中核である薩摩・長州両藩から恨みを買っていた会津藩と米沢藩に同情的な奥羽二十五藩、北越六藩が同盟を結び、薩長主導の政府軍に対抗した。

二 小説『葬列』における岩手公園

(前述した短歌の書かれた四年前) 一九〇六(明治三十九)年、啄木は小説『葬列』を書いた。その中で岩手公園(それを含めた盛岡)が取り上げられているので、それについて考察してみよう。

『葬列』は『明星』十二月号に発表されたもので、啄木の小説としては初めて活字になったものである。「予は十九日夜に稿を起こして、二十二日夜までに、小説『葬列』の前半五十七枚を脱稿し『明星』に送った」と『洪民日記』の中で記しているように、洪民小学校代用教員時代の明治三十九年十一月十九日夜から、二十二日夜にかけて創作されたものである。

『葬列』の冒頭に「久し振で帰ってみると嘗ては『眠れる都会』などと時々、土地ところの新聞に罵られた盛岡も、五年以前とは余程その趣を変へて居る」と書いているように、五年ぶりに訪れた盛岡の大きな変化が取り上げられている。

その例として、主人公立花浩一の寄寓していた新山堂の伯母(母の姉)の家が魚屋に変わったこと、友人の藻外(盛岡中学時代の友人、瀬川深をモデルにしていると『洪民日記』には記されている)の所に行くのに通った道が廢道同然になり幅広い新道が出来たこと、平屋造りの県庁が立派な二階建の洋館に変わったこと、肴町呉服町に神田小川町で見たような本屋、文房具屋が出来たことなどが挙げられている。さらに「破天荒な変化」として電燈会社が建

ったこと、女学生が靴を履くようになったこと（その前までは下駄履だった）、中津川に臨んで洋食店レストランが出来たこと、そして「荒れ果てた不来方城が、幾百年来の蔦衣つたじろもを脱ぎ捨て、岩手公園とハイカラ化した」ことが挙げられている。以下、不来方城が岩手公園となつてあらたに誕生したことをめぐつて感想や空想が書き連ねられていく。

『葬列』は小説としては浜民で書かれたが、代用教員になる直前の体験、即ち盛岡での新婚生活（注二）のころの見聞や体験が反映している。（注三）小説の発表された一九〇六（明治三十九）年から遡ること五年の間に、時代の変化に取り残されたような「眠れる都会」盛岡も大きな変貌を遂げた。それは一口にいつて、建物や風物の西欧化、文明化であり、「岩手公園」はそれを代表するものだった。

「公園」という言葉は、欧米の公園制度の導入とともに造られた語で、「遊園」とか「逍遙園」という訳語も工夫されたが、一八七三（明治六）年に「全国社寺境内、公有地を万人偕楽の地とし公園と可被相定に付」という太政官布告が發布され、上野公園や浅草公園などという固有名詞とともに一般化していった。公園の誕生ということとは封建社会の権力の象徴である城郭や、信仰心の表われである神社仏閣を、過去の文化、歴史を知る生きた教材とすると同時に、市民の憩いの場にしようとする市民社会の成熟がその背景にある。そして「公園」という言葉の響き自体、日本においては「ハイカラ」な、欧米文化を髣髴とさせるようなイメージをもっていた。公園が整備されると、そこを拠点として周囲の環境、建築なども変わっていくことも多い。岩手公園の場合、「電燈会社」とか「洋食店」などはその一例とも考えられる。新しい風俗、建築の導入と共に、「公園」の誕生もあった、ともいえるようか。

「城址」がこのように整備されることによって、かつての荒城の醸し出すイメージ……「松風」「鐘の声」をなつかしみ、それが失われたことを嘆く懐古的な人もいよう。また、そこに人生の無常を感じる人もいよう。しかし啄

木はそうでなかった。啄木は「開園式が済んだ許りの、文明的な、整然とした、別に俗気のない、そして依然昔と同じ美しい遠景を備へた此新公園が少なからず、自分の気に入った」と記している。荒れ果てた草の生い茂る「不来方城」よりも、手入れの行き届いた「文明的な」（おそらく、ベンチや案内板などもそこに設けられていたであろう）、人々を招く憩いの場としての「岩手公園」に好感を持ったのである。公園はそのようにこざっぱりと整理されたが、変らないのは「昔と同じ美しい遠景」である（それは後に賢治の文語詩によって具体的に描かれることにもなる）。また前節の短歌と比較してみるなら、「教室の窓より遁げて」等の短歌が、今は失われてしまった「不来方の城址」それと重なる自らの青春を回想して生まれたのに対し、これは目のあたりに岩手公園を見ての感想である。新しく生まれた岩手公園を喜びをもって受け入れたところに、西洋に憧れ、文明の進歩を夢見る若き啄木の心情をみることもできる。

岩手公園についての感想を語った後、啄木は少し遠慮がちに「これは、人の前で、殊に盛岡人の前では些憚って然るべき筋の考であるのだが」と断りつつ、ある空想を語る。それは「此公園を公園でなくして、ツマリ自分のものにして」、「希臘ギリシャか何処かの昔の城を真似た大理石の家」に住み「雲より白い髪をドッサリ垂らし」「露西亞の百姓の様な服」を着て、唯一人住み、終日読書、晴れた日には星の世界を研究、曇天や雨の夜は空中飛行船の発明に熱中、空腹の時は川岸の洋食店から上等の料理を注文、一年に一度ローマ皇帝の乗ったような輦くるまで市民を廻り、足なえ、盲人、癩者に手を触れて治す（その前に「催眠術の奥義を極めて置いて」と断り書きしている）：啄木のこの空想の中に、西洋への憧れ、科学（文明）の進歩に対する憧れ、神秘主義や天才的存在（キリスト）への関心などを読みとることができよう。それにしても、何という自己中心的な、尊大な空想であろう。それは自らを天才と半ば信じる意識ともつながっている。

もちろん、そのような空想は長続きするわけもなく、たちまちにして、シラけてしまう。それにしてもこういう空想にふけることができた、という点に、まだ実社会の厳しさを知らない、啄木の幼児性をみることが出来る。

岩手公園をわが庭とする、というほしいままなる妄想に一時耽った啄木の、この頃の現実はどうであったか。久しぶりの盛岡での生活、それは節子との新婚生活という希望に満ちた生活の始まりではあったが、妹の光子や、老いた父母をかかえての借家暮らしであり、定職を持たず、ささやかな原稿料で家族を養わねばならないという苦しいものであった。

その苦しさから逃れるためにも父一禎の報徳寺復帰は果たさねばならなかった。洪民での代用教員としての生活を始めたのも、教師として家族を養うためではなく、父の再住問題を解決するためであった。洪民に移った啄木一家は農家の一室を借りて貧しい生活を始める。それは『葬列』において空想した、豪華な庭園を備えた大理石の邸宅とは対極にある現実であった。しかし啄木はまだその矛盾に気づいていない。まじめに現実を見つめ、働いて、家族を養って生きていかなばならない、という決意は抱いていない。厳しい現実に向直しながらも、文学者たらしとする夢と自負の中に啄木は生きていた。

(注一) 啄木は明治三十八年六月から翌年の三月三日までの九ヶ月間、盛岡で新婚生活を送った。相手は初恋の人、節子である。

(注二) 『洪民日記』には、盛岡加賀野積町の啄木一家の借家に新山堂の孝子さんが遊びに来て、高沼茂(『葬列』に登場する浅沼茂のモデル)のことを語ったこと、それが「非常に愉快に感じられて、この事を是非書いて見ようと思って居た」ということが記されている。

三 賢治短歌における岩手公園

啄木が洪民村から盛岡市に勉学のために来たように、賢治も花巻からここ盛岡に、勉学のためにやってきた。盛岡はこの二人にとって、遊学の地であり、青春を育む舞台であった。啄木は一九〇二（明治三十五）年、数え年十七歳で盛岡中学を中退するまで約八年とそれに新婚時代の九ヶ月、賢治は十三歳で盛岡中学に入学した一九〇九（明治四十二）年から、盛岡高等農林学校卒業後研究生として過ごした二十三歳までの十年間を、ここ盛岡で過ごしている。勉学は学校生活を中心にしてなされるわけだが、その人間形成、文学形成においては学校を取り巻く地域社会―その風土や人間などの環境が果たす役割も大きい。

盛岡中学に入学した賢治は早速、岩手公園を訪れている。「明治四十二年四月より」と題する歌の中に次の一首がある。

公園の円き岩べに蛭石をわれらひろへばぼんやりぬくし

盛岡中学の、新しくできたばかりの友人と一緒に岩手公園を訪れ、蛭石を拾った。蛭石は急速に熱すると水分が放散して蛭のように伸びるのでその名があるというが、温かい春の陽射のぬくもった蛭石の感触が印象的だった。岩手公園の四月といえば、桜の花の蕾がほの赤くちらちらしているし、あるいは花も咲いていたかもしれない。しかし、十一歳のころから鉱物採集に熱中し、家族から「石コ賢さ」とあだなされていた科学少年賢治にとって、岩手公園の花も景観も、またそこからのべる歴史も目に入らなかつた。

続いて「大正五年七月」としてまとめられた歌稿の中に「岩手公園」と題する次の一首がある。

うちならび／うかぶ紫苑にあをあと／ふりそそぎたるアーク燈液（三五四）

（歌の下の番号は「ちくま文庫」の『宮沢賢治全集3』に拠った。斜線は改行マークを示す。賢治は啄木の『一握の砂』の影響を受けて歌を作り始めたが、分かち書きもその影響だとも考えられる。）

続いて「大正七年五月より」と題してまとめられた歌稿の中に「公園の薄明」と題して次の七首がある。

青黝^{くろ}み 流るる雲の淵に立ちて／ぶなの木／薄明の六月に入る（六五二）（注二）

暮れざるに／けはしき雲のしたに立ち／いらだち燃ゆる／アーク燈あり（六五三）

ニツケルの雲のましたにいらだちて／しらしら燃ゆる／アーク燈あり

黒みねをはげしき雲の往くときは／こころ／はやくもみねを越えつつ（六五四）

燃えそめし／アークライトの下に来て／黒雲翔ける夏山を見る（六五五）

燃えそめし／アークライトは／黒雲の／高洞山を／むかひ立ちたり

黒みねを／わがとびゆけば銀雲の／ひかりけはしくながれ寄るかな（六五六）

賢治の好んだ語の一つに「薄明穹」という言葉がある。薄明の夜空をいったもので、薄明は日没後、または日の出前に空が薄く光る現象をいう。「薄明穹黄ばみ濁り／こひのこころはあわただし」（「冬のスケッチ」とか「やがて太陽は落ち、黄水晶^{シリトン}の薄明穹」（童話『まなづるとダアリア』）などという表現もある。いずれも、たそがれになる少し前の黄色の空を表現したものである。これらの短歌も夕方の「薄明」に包まれた岩手公園とそこから見える情景を詠んだものである。青みがかつた雲、銀色に輝く雲、彼方に見える黒い山の影、白いアーク燈の灯…夕暮れ時の岩手公園からの眺めは賢治の心を捉えた。

一九一七（大正六）年、賢治二十一歳の時、弟の清六が盛岡中学に合格、下の橋のそばの玉井郷方^{ごうほう}（注二）方に共

に下宿することになった。その時賢治は「君が下の橋の近くで、私と一しよに下宿することになって、そこから中学校に通学出来るといふことは実にいいことだ」(宮沢清六『兄のトランク』ちくま文庫)と喜びの手紙を出している。

当時、盛岡中学は盛岡市の中央(内丸)にあつて、その下宿から公園を通つて行けばすぐ近くにある、という意味もあつたが、それ以上に岩手公園の眺めの魅力を弟に伝えようとしている。手紙は、次のように続いている。

「玉井さんの家から下の橋の方に歩いて見給へ。」

その教会に向つて左に曲がつて少し行けば『作人館』である。その学校の裏の広場に出れば、君はそこで岩手公園の美しい生垣を見るだらう。その石垣の蔦つたの立派なことはどんな季節でも、いつまで見ても、あきることはないだらう。そしてその辺の芝草が、もういまごろは鋭く鳴つてゐる筈だ。それから君は公園のグラランドの方に行つて見給へ。もう鶯鳥たちが長い首をのびして、蛇のまねをしながら君たちを追ひかけて来るだらう」

賢治がどれほど盛岡の、特に岩手公園とその周辺の風景を愛したかが知られる手紙である。玉井家に下宿した賢治は、高等農林の、朝夕の通学の道として岩手公園を通り、学業を終えた夕方、時として岩手公園のグラランドに上り、盛岡の町並、彼方の山々を見つめながら思いに耽つた。そのような体験がやがて晩年の文語詩「岩手公園」を生むことになった。

(注一) 以下、六五二、六五三、六五五、六五五の次の歌には異稿があるので紹介しておく。

青みわび流るる雲の淵に立ちて六月に入る薄明のぶな(六五二)

暮れざるに険しき雲の下に立ち白みいらだつアーク燈かな(六五三)

暮れそむるアーク燈の辺雲たるる黒山に向ひおかれしベンチ（六五五）

燃えそめし／アークライトは／黒雲の／高洞山に／むかひ置かれき（六五五の次）

（注二）盛岡高等農林学校の寄宿舎に入ったのは入学した一九一五（大正四）年の四月。二年間を寮で生活した後、弟の清六、従弟宮沢安太郎、盛岡農学校入学の従弟岩田磯吉と共に玉井家に下宿した。現在この玉井家の井戸が「賢治の井戸」として保存され、また、その井戸から汲み上げた水は「賢治清水」として利用されている。（下の橋のたもと付近）

四 文語詩「岩手公園」

賢治はその晩年、三十五歳から死（一九三三年—昭和八年九月二十一日）に至る二年の間、文語詩の創作に心血を注いだ。死を意識する病いの床にあつて、自らの半生をふり返りつつ書かれたその詩は、詩による自伝とも呼べるものである。それらの詩篇が「文語詩五十篇」「文語詩一百篇」として定稿としてまとめられたのは、その死のわずか一月ほど前のことであつた。（前者は八月十五日、後者は八月二十日にまとめられている）

「文語詩一百篇」の中に「岩手公園」と題する次の詩がある。

「かなた」と老いシタピングは、（注一） 杖をはるかにゆびさせど、

東はるかに散乱の、 さびしき銀は声もなし

なみなす丘はほうほうと、

青きりんごの色に暮れ

大学生のタッピングは、

口笛軽く吹きにけり

老いたるミセスタッピング

「去年こそなが姉はここにいて、

中学生の一組に、

花のことはを教へしか。」

弧光燈アークライトにめくるめき、(注二)

羽虫の群のあつまりつ、

川と銀行木のみどり、(注三)

まちはしづかにたそがるる。

文語詩は凝縮した表現で書かれているだけに、そのまま口語に置き換えても意味がとりにくい。そこで、言葉を補いながら、一通りこの詩の意味をとってみると次のようになろうか。

(第一連)「あちらの方をごらん」と年老いたタッピングは、その杖で指差して示すが、東の方、はるか彼方を見やっても、夕暮れ時の日の光が空に散乱し、さびしく銀色に光る雲が見えるだけで、ここ岩手公園はひそとして人声もない。

(第二連)東の方に連なる山々はぼうぼうと、青いりんご色に暮れていくが、そんな静かなたそがれ時、共に来た息子の大学生であるタッピングは、軽やかに口笛を吹き出した。

(第三連)老いたミセスタッピングは、口笛を吹くその息子に言った。「去年、お前のお姉さんのヘレンは、この公園に盛岡中学の生徒達を連れてやってきて、その時、公園の花を見ながら、英語の花言葉を教えたんですよ」と。

(第四連) 弧光燈の光にめくるめくようにして羽虫の群が集まっている。中津川の流れと、赤煉瓦作りの岩手銀行、公園の木々の緑、それらをすべて包み込むようにして盛岡の町は静かにたそがれ、闇の中に消えてゆく。

この詩は賢治が宣教師のタッピングと、その婦人、そして息子と四人で共に岩手公園に行った時の一場面を思い起こして書いたものである。実名を登場させ、しかもその言葉や行動を具体的に記しているところからみて、タッピング家の人々と共に岩手公園に行き、このような言葉のやりとりがあったということも、そのまま事実と考えられる。もちろんタッピング一家の言葉は英語であり、賢治もおそらく英語で(あるいは「英語を交えて」とも考えられるが、英語が得意であったことからして、おそらくすべて英語で、という方が近かったと思われる)さまざまなことを語りあつたであろうが、その言葉も文語に直して端正な、しみじみとした味わいをもつ小品としたのである。

タッピング牧師 (Henry Tapping 一八五七―一九四二) はアメリカのウイスコンシン州生まれで、プロテスタント系バプティスト派宣教師として来日、一九〇八(明四一)から一九二〇(大正九)年まで盛岡浸礼教会バプティストの牧師をつとめた(現在この教会は日本基督教団内丸教会となっており、賢治の学んだ盛岡中学校のすぐ後ろにある)。タッピング牧師は宣教の傍ら、盛岡中学で嘱託として英語を教えた(賢治が中学一年の時に嘱託を辞任しているが、教室でその教えを受けたらしい)。高等農林入学後、賢治は、同級生の出村要三郎を誘ってタッピング牧師の開いていたバイブル講義を聞きに行っている。出村は当時を回想して次のように書いている。

「一年の二学期だったか宮沢くんは誘はれてタッピング牧師がやっていたバイブル講義を聴きに行った。週一回の講義だったが彼は英語がうまく、英語と日本語半々で話しタッピング師によくほめられていた。英語のマスターとキリスト教への関心が彼の目的だったように思う」

タッピング牧師が盛岡に来たのは五十歳を過ぎており、この詩は賢治が高等農林に在学中、共に岩手公園を訪れた時のことを回想して書かれたものである。出村の証言にあるように、高等農林の一年生の時だとすれば牧師は五十八歳である。「老いしタピング」は、足もおぼつかなく杖に頼っていたのである。その杖で彼方を指差し、賢治に何事かを語った。周辺の山々を知り尽くしている賢治は喜んでその話を聞き、英語で語ったであろう。しかし、詩の中では賢治自身の言葉は何一つ記されていない。

第二連は老いたタッピングの言動と対照的な、若々しい大学生のタッピングを登場させている。大学生のタッピングの行動として、口笛を吹いたということが記されているが、そのことで青年らしさを暗示させる見事な描き方である。

第三連のミセスタッピングの言葉も、いかにも彼女にふさわしい。息子のタッピングは大学生であるから盛岡に暮らしていない。その息子に、今ここにいる賢治ら盛岡中学の学生達に花言葉を教えたんですよ、と語っているのである。賢治はその時、姉から教わった花言葉について語ったり、その時の思い出を語ったりもしたであろう。

以上のように、タッピング一家三人の言動を、それぞれ一つづつ、鮮やかに印象深く描写した後、第四連で、岩手公園から見た夏の夕暮れ時の眺めが静かに描かれている。第一連から第三連までは人物の言動を描き、第四連でそれらをすつぽりと包むような景を描く。人物と景とが渾然一体となって、一幅の絵をみるような感じがある。病床の賢治は十五年以上も前の出来事を再現しつつ、「岩手公園」の詩を完成させた。

その時、情景を思い出す手がかりとなったのは、前節で紹介した岩手公園を素材として歌った短歌群であった。暮れ方の、アークライトの岩手公園の情景はこれらの歌によってまざまざとよみがえってきたことであろう。興味深いことは、短歌には「人間」が登場していないのに、文語詩になった時、タッピング一家、そして以下に述べる、

ひそかに恋い慕う人、自分自身など「人間」が登場しているということである。

文語詩「岩手公園」は実は、二度にわたる原稿の大きな手直し、推敲を経て完成されたものだった。
先駆形（A）は次の通り。

弧光燈アークライトは燃えそめて

羽虫ははやく群れたれど

東はるかに散乱の

さびしき銀は声もなし

物産館のテレースや（注四）

川と銀行木のみどり

ひとひらごとにかがやける

小学校の窓ガラス

起伏の丘はゆるやかに

青きリングの色に暮れ

高洞山の焼け痕は（注五）

〔三字不明〕にこそ似たりけり

こころせはしきいちにちの
ブンゼン燈をはなるれば
ああまたひとりここにして
誰にもあらぬひとを恋いふ

先駆形（B）は次の通り。

弧光燈は燃えそめて

ゆふべをしろくいらだてど

東はるかに散乱の

さびしき銀は声もなし

なみなす丘はぼうぼうと

青きりんごのいろに暮れ

ひとりそばだつ高洞山は

山火の痕をすぐろへり

まひるを経来し分析の
酸のけぶりに胸いたみ
わがしはぶけばあやしみて
ふりさけ見ゆく園つかさ

弧光燈にめくるめき、
羽虫の群のあつまりつ
川と銀行木のみどり
まちはしづかにたそがるる。

先駆形（A）、（B）と定稿比較すると次のことがいえる。（注六）
まず共通点として、次のようなことが挙げられよう。

第一に、いずれも七五調を四回繰り返して一連となし、四連をもって巧みにまとめた文語定型詩である。文語詩の中には推敲過程の中で、その形式まで変え、表現を切りつめていくものも見られるが、この詩の場合、その形式まで変更することはなかった。

第二に、いずれも岩手公園と、そこから見た眺めが中心となっていて「弧光燈」^{アークライト}「東はるかに散乱のさびしき銀は声もなし」「川と銀行木のみどり」は、いずれの詩にも共通している。つまりこれらの詩句によって示される舞台―岩手公園のイメージは動かし難いものとして、今その場に立っているようにまざまざと思い出されたのである

う。

次にその違いを考えてみる。

第一に同じ岩手公園からの眺めでも、(A)には「物産館のテレーズ」や「小学校の窓ガラス」などが描かれている。また(A)(B)いずれも、岩手公園の東の方、上米内にある「高洞山」が描かれているが、定稿では消えている。

第二に、それぞれの詩に盛られた賢治の当時の思い、生活が大きく異なっている。(A)は「ああまたひとりこにして誰にもあらぬひとを恋う」ときわめて情熱的な恋心、秘めたる恋の思いが熱い詠嘆となって吐露されている。(B)では、「まひるを経来し分析の／酸のけぶりに胸いたみ／わがしはぶけばあやしみて／ふりさけ見ゆく園つかさ」と、高等農林での勉強(化学分析の実験)を終えて、夕方帰路として通り過ぎた岩手公園での様子が描かれている。ところが定稿を見ると、秘めたる恋や、高等農林での生活をしのばせる表現は、全く惜しげもなく切り捨てられ、あらたに登場するのがタツピング一家の三人である。しかも、三人の言葉や行動を写す表現の中で、作者である賢治は完全に影に隠れてしまった。賢治のこうした推敲過程をみると「岩手公園」という舞台や、タツピング一家の方が重要な意味をもち、自らは、それを描くための「目」になってしまっているような印象さえ受ける。人や景を描く中で、自らの思いは沈潜し、秘められてしまったといってもよいだろう。

賢治は啄木と違って己れを語るのに遠慮深かった。推敲を重ねるに従って、己れの影は薄くなり、かえってあらたに強まっていくのは賢治の出会った人々、交流を深めた人々の姿であるようだ。これは文語詩全体についてもいえることで、忘れがたい情景や印象に残る人々の姿が数多く登場しているのが、文語詩の一つの特色となっている。

また、賢治の文語詩は、病床に臥して、十五年以上も前の情景を回想して書かれたものであるが、すべて現在形

で書かれており、「回想に伴う「なつかしさ」の情緒はみられない。啄木の短歌が五、六年前の盛岡中学時代をなつかしむ情緒に彩られているのと大きな違いがある。賢治は文語詩を作りながら、なつかしさに耽るのでなく、今まさにその情景をまざまざと味わい、その時の気持ち、そのものになってあたかも、タイムスリップしてしまったような書き方をしている。

しかし、十年以上も昔の出来事や情景をその時の気持ちそのものになって詩として表現できるわけではないだろう。文語詩の創作には、それを書いている時点での賢治の美意識があり、その創造をめざして書かれた。素材として自らの過去を今一度味わい、生きることを通して、『春と修羅』とは全く異質のあらたな詩を生み出していったようだ。推敲を重ねるに従って自らの激しい恋の思いは削り落とされ、抑制のきいた簡潔この上ない表現に向かったといったこと、自らを語ることがより少なくなっていたことも、賢治のめざす文語詩が何であったかを示しているように思われる。

それにしても私達は、賢治の文語詩を読む時、その定稿として完成されたものを中心として、下書きはすべてそこに至る過程に過ぎないと解釈していいのだろうか。私の率直な印象をいえば、下書きは決して単なる下書きではなく、時にはその中にこそ秘めたる賢治の心や生活が定型に劣らないくらいすぐれた表現を通して描かれているようにみえるのである。

(注一) 文語詩「岩手公園」の中で「タッピング」「タッピング」両方の表記がなされているが「タッピング」としたのは定型詩としての音数に配慮したためと思われる。下原稿をみると「タッピング」と表記した後で「ッ」に斜線を施している。原音としては「タッピング」の方が近いので以下、そのように表記する。

(注二)「アークライト」は、二つの炭素電極間に電圧をかけた時起こる放電による淡紫色の光を用いた電燈で、放電が弧形(アーチ)に見えるところから、そう呼ばれる。明治時代に街燈としてよく用いられた。

(注三)「川」は中津川、「銀行」は岩手銀行を指す。下書稿の中に「赤きれん瓦の銀行」という言葉が見えるように赤煉瓦作りの、西洋風、モダンな建物であった。

(注四)「物産館」は今の岩手県立図書館の付近にあった。下書稿には「物産館の灰いろや」という言葉も見える。「テレース」はテラス。洋風建築で庭などに張り出された広いベランダテラスのこと。アークライト、銀行、物産館、いずれも西洋風の珍しいハイカラな建築物として、周囲の日本風家屋や山や木々の中にあつて印象に残る光景であつたらう。

(注五)下書稿を見ると「ひとりそばだつ高洞山／山火の痕ぞかぐるなる」という言葉も見える。「高洞山」にはいづれも「たかぼら」とルビが施されているのは音数を配慮し七五調の定型を守ろうとしたためである。賢治自身口ずさみつつ文語詩を作り、また人々にも口ずさんでほしいという願いがあつたものとも思われる。高洞山は岩手公園から見ると北東約六キロ、米内川と中津川に挟まれた所に位置する標高五二二メートルの山である。

(注六)ここでいう(A)(B)は一枚の原稿の表、裏で、まず最初に表に書いて、それに手を加えて、裏に書き、その裏に書いたものに手を加えたものである。それを別な原稿に書いて、これに更に手を加えたのが定稿で、定稿として清書された原稿は存在しないが、かつての十字屋版全集の口絵に写真が収められたので、それを定稿とした。なおまた、先駆形(A)(B)という名称や、その整理の仕方は「ちくま文庫」の「宮沢賢治全集4」に拠つたものである。